レイテンシ[latency]

五十嵐優哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
　この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
レイテンシ［ｌａｔｅｎｃｙ］

【Ｎコード】
Ｎ４１９７Ｉ

【作者名】
五十嵐優哉

【あらすじ】
　詩では初めての執筆となります、蒼井碧です。
今回はあまりコンセプトもなく（笑）、つれづれなるままに綴っていきたいと思います。
恋愛の詩が中心となっていますが、たまに色物も入っています。
影響は谷川俊太郎、銀色夏生に桜井和寿が少々。

日曜・木曜に２編ずつ更新、

３０編程度を予定。
では、お手柔らかにお願いします。

笑みの樹の下

少し怖いからまだ距離を置いたままいようか
裏切られるのに慣れた僕は未だに臆病
ごめん　もうちょっと待ってて
君の微笑みを受け入れられる時が来たら

ねぇ　何もかも　抱き締めて
涙を埋めて笑みに咲こう
さぁ　僕は手を伸ばすから
ちゃんと掴んでくれるかい？

何で僕なんだろう？
何で君なんだろうと悩まず
優しい瞳が見つめる世界たちを信じよう

暗い闇の中独り泣いているのにはもう疲れてしまったんだ

ねぇ　お互いは弱いから
支え合って強くなろう
　大事な物総て捨て去る訳にいかない

ねぇ　何もかも抱き締めて
涙を埋めて笑みに咲こう
　そして大切な　夢守る樹と日陰になろう

笑みの樹の下（後書き）

改めまして、蒼井碧です。

ここでは、簡単に詩の説明をしていきたいと思います。

これは、何というか、当時の自分の気持ちがストレートに出ていま
す。

傷ついたことがあって、何もかもが不安でしょうがなくて、だから
差し伸べられた手が怖くて掴めない……でも、ポジティブでありた
い。

そんな願いを込めて書きました。

人を好きになるって、とてもエネルギーがいることなんだよ。
でも、そのエネルギーはまた新しい力を生むんだ。
今は、それがすごくわかります。

笑みに咲く花

僕は前に進んでいるのか
留まり進めないでいるのか
振り返る日々を想い　不安が僕を襲う

忙しなく過ぎる時代（とき）の中で
君は迷子になってませんか
焦らないで　立ち止まり
静かに瞳閉じて

孤独に打ちひしがれた時
あの唄があったように
泪を拭いた僕が居たこと
ゆっくり、想い出して

どんな場所で
どんな人と
どんな唄を唄っていたって
想いはずっと変わらない

亡くした物の数を数えて
増えた後悔たちに向かって
サヨナラ、することは出来ない
足跡は消せないから

でも君のこと忘れなかった！
小さな勲章はまだ胸のポケットの中で

光り輝き続けてる

日なたに咲いている花びらは
君へと微笑むから
疲れた時にはいつでも
ここで休んでおくれ

君もいつか誰かを愛し
永久を誓う時が来るのでしょう
その時には優しい
温もりを二度と離さずに
無垢な笑顔を絶やさないように
信じ続けて、お互いを

どんな場所で
どんな人と
どんな唄を唄っていたって
想いはずっと変わらない
振り返るもいい　取り戻すもいい
だけど繰り返しにはならぬように
君がくれた勲章を抱いて

笑みに咲く花（後書き）

この詩に関してはノーコメントでお願いします。

あ、感想はくださいよ（笑）？

状況をきっちり説明することが難しいので。
ちなみに、詩は古いものから載せていきます。

慢心

平気で君を傷付けて　胸を痛めていい気になっている
許せないのは君の言葉じゃなくて　僕の態度
我慢することをおぼえてしまった君はただ黙っているね
僕たちは多分、ずっと二人にはなれないんだろう
無力な僕には僕を変える術がない

一人と一人のまま
たわいない日々で幸せだった
君の言葉が正しかった
多くを望もうとするから傷付ける
関係のない人まで巻き込んで

慢心したのは僕　舞い上がれば墜ちることを知らず
正しいのは僕の想いじゃなくて　君の背景
決めることを恐れてしまった僕はただ彷徨い続けている
ゲームに参加してはいけなかったのにそれを無視した
最低な僕には釈明の余裕などない

一人と一人ならば
今更闇に迷い込むことなんてなかった
きっかけなんて要らなかった
先を知ろうとするから腕はもがれる
思い上がりはもう辞めなければ

Don't be

与えられたまま役割を演じて
毎月手に入るサラリーに疑問を持たずに
「今が続いているから別にいいです。」
何かを欲しがったところで掴めるとは思っていない

このままでいいのかなぁ？　日々を繰り返して
このままでいいのかい？　明日を享受して
この素晴らしい世界　ルーチンワーク・デリバリー
いっそ壊れてしまえ　そう僕は思うんだよ

誰かの陰謀だとも気付かぬまま
彼は同じ思考を繰り返し続けていくが
その実、死刑台に向かっているのさ
首をくくっても彼は言うだろう「それなりに満足だった」と

悪ふざけもいいところ　何故武器を取らない
総てを奪われ欠けていると何故理解できない
ああ美しき世界　しわがれた声がリフレイン
僕は彼とは違う、未来を自分のものにしよう

もうやめよう　何者かの振りをするのは
そして君は君になれ、僕は僕になる

page

君に逢うころにはもう
涙は乾いているだろう
まるで二人の旅路を
暗示している詩を読んで
終わりに震えて泣いていたなんて
悟らすわけにはいかないから

誰かを想って流す涙が
喜びのそれであればよかった
今溢れている気持ちは違くて
まともな恋なんてしなければ
悲しくならずにいられたのに

二人心を重ねて
紡いでいけたらよかったね
上手く行かなくなっていく恋は苛立ちばかりを生む

君へと優しくできる強さを
持っていたなら今ごろ二人
離れぬ術を持っていたかな

君とは手さえも繋げないまま
虚しさの中消えていくのかな
今目の前で微笑っているけど
幻なのかもしれないね

互いの弱さは誰のせいにも
出来ないだけ余計悲しい
最後のページをめくるときには
君は届かないどこかにいる

君を想って流す涙が
不安なそれでなければよかった
もう引き戻せるものなどなくて
僕への贈り物が視線を
投げかけ問いかけ続けている

W／U

君が褒めてくれるから
僕はもっと格好良くなろうと思った
君はおだてたり心にもないこと
僕には言ったりしないから好きだ

みんなが捨てろという古い玩具を
一人、大切にしてねと微笑ってくれた
君一人だけだった

照れ笑いで困っている表情を
もっと見たいと思う意地悪な気持ち
優しくありたいからゆっくり撫でる髪
指先に込める想いのどちらも等価だよ

ゆっくり
ゆっくり進もう
ゆっくりでいいんだ
駆け抜ける恋なんて要らない

ゆっくり
ゆっくり描こう
焦ってはいけないんだ
二人が少しでも永遠に近ければいい

latency

貴方への怒りを封筒に仕舞って燃やしてしまおう
炎が部屋照らす　隣に静かな愛しき横顔
諍いの日々を二人何度も重ねてきては
何日か崩れる日を願ってた

さようなら　今までの苦しみの涙よ、もう二度と遭わなくていい。
欲しいのは柔らかな日射し、そして微笑み
灰になったら寝よう　ｕｈ・・・　明日は来るから

貴方の戸惑いが手に取る様に判り、耐えられず笑う
私の思惑を理解した後は怒りが沈んで
絡む指先は今確かな効力を持って
互いは物じゃない意味を知る

強さで相手の意思を閉じ込めて終うことは容易いのよ。
傷口を増やすだけ増やし喚けばいいもの
でもそうじゃいけない　戻れないなら只、進むのは厭だ

二人が居る世界で起きてる事、目を閉じずに確かめておきたいの。
許し合える心が在るのならば、道は見えるよ。

ありがとう　これからの慈しみの日々よ、ずっと繋がって行けたら
大きな手　細めた瞳　等しく響く鼓動
ゆっくり近付けたい、途切れぬよう、想いを重ねて
ずれなどいっそ、埋めてしまおうか。

誘い

自分のために詩を紡いでは
痛い痛いと泣いていた
でも、僕は本当は幸せにしてあげたいんだ
伝え方がわからない

とりあえず、と単語とかを並べて
僕はそれらしいものを書き上げてみる
誰に向けることもなく
ただ眠らせることはせず

通信網の向こうには
褒めてくれる人しかいない
だから、調子に乗ってはいけない
むしろ自分は堕落していることを自覚するべき

貴女だけが批評をしてくれる
理解が新たな解釈を提案する
僕はその度にあぁ、と嘆息する
違う側面を指差し、誘ってくれる

もう少しでわかりそうな気がしている
だから、あと少し手伝いをして欲しい
今、一つ理解していることはあるんだ
貴女が僕の幸福

二人がいた

泣くことを忘れるかわりに
笑顔の造り方を覚えた
手を伸ばしたら君に触れた
君は泣いていた

造り笑いをしたら嫌われた
理由がわからないままボールは転がっていく
小さなかすれた想いを乗せたつもりだった

そんな顔をするぐらいなら
いっそ泣いてくれればいい
もう涙は思い出せない
でも、笑顔ならまだ

偶然を折り重ねて生み出される意味
そこに二人がいた

標

月を見上げて日の短さを知る、と
どれだけの人が語ってきたのだろう
でも言わずにはいられない
そうだったんだろう？

誰の言葉も想いを伝えないとき
耳を手で塞ぐ
唯一届く鼓動
それが君だ

自分に迷う度
背中を押してくれる誰かがいた
迷ったっていいんだよ
自分で決めればいいんだよ
そのための手伝いはいくらでもしてあげる
そう言ってくれた

今度は誰かが道に迷うとき
差し示す標でありたい
時間ならいくらでもあると教えてあげたい
例えそれが使い古された想いだとしても
構いやしない

ゆびきり

小さなずれを重ねるように
言葉を紡いでいく僕たち
ささいな勘違いもしないように
何度も囁きあって

「喧嘩してもそのあとで笑おうね？」
それが最初の約束　指切り

いつまでも同じがいいと言ったから
僕は居残ることを選んだ
好きだから、とかいう曖昧な理由じゃなくて
どこまでも続く坂道で息切れしそうになっても
どうかお互いに笑い合えるように
今日も冗談交じりの日々は続く

彼女だとか恋人とか
そういうのは今はどうでもいいよ
決断は君に任せるよ
どちらにせよ、覚悟は出来てる

お互い大切なもの同士だから
変わらない想いでいたい――君の言葉

きっと何もしないままで
何度も僕らは時間を超えていくだろう
静かな想いを胸に仕舞って

涙の雨に滲んで例え読めなくなっても
意味までぼやけてしまわぬように
間違いながら　明日へ繋いでいく

「さよなら、別々の恋を選んでね？」
それが最後の約束だとしても

何も誰のせいに出来ないことは
最初からわかっていたから
手を振ろう、でもそのときぐらいは泣かせて
形式(かたち)が何であれ　他人(ひと)が僕らをどう呼んだって
僕ははっきりと言える、愛してると
嘘偽りなく愛していると

大きなずれは力ずくで直せなくても
君と歩んだ日々が胸にある

費やす日々

恋とか愛を浪費して横切る二人組たち
私は貴方を思い出す　駄目だ、顔すら浮かばない

つい先刻まで笑い合っていたのにね
何を話したのかも憶えていない

探るように日々を数えながら
私は貴方と対峙してきたけど
もう折れてしまいそうよ
貴方があまりに其のままで居るから

意味とか時間を浪費して私たちの定義を探した
残り香だけ漂わせ、静かに無駄を増やしてきた

いつまで惰性を続けていられるのかな
判らないけどまだ暫くは続きそうね

どうか私が潰れて失われてしまったら
貴方は亡骸に触れないでいて
総て風に紛れてしまえよ
何も遺したくない

すぐに手に入る幸せならば
辛くなかったのに

二つの傘

君のメール、傘を持って家を出た
冷たい音も何故か心地いい
人ごみの中何しているかなぁ？
僕のこと、少しでも考えてくれてるかなぁ？

素直になりたいと願うばかりで
何もしてこなかった僕を
本当は許せないはずなのに
本当は怒ってるはずなのに

途中で沢山の傘とすれ違う
僕と同じように、傘をもう一つ持つ人
誰かを迎えに行くんだろうな
ちゃんと二人、出逢えたらいいな

小手先や口先で上手く立ち回ろうとして
いつも失敗に終わってしまう僕を
どうして認めてくれるんだろう
どうして受け入れてくれるんだろう

駅前、君は傘を受け取って
一緒に隣を歩いてくれる
どうでもいい言葉ばかりが街に流れていく
伝えたい言葉は喉元から肺に戻っていく

僕たちにふさわしい名前なんて見当たらないけど
今はそれでも良しとして暮らしている

始まりとか終わりとかもうどうだっていいや
わからないならそれなりに日々を続けていくしかないんだから
不器用な心を指先で辿るよ
今日も明日も

Ｈｉｇｈ

ハイビームの煽りがうざったい
速度は３０ｋｍ／ｈ　ｏｖｅｒ
オーディオは　ＭＡＸ　Ｖｏｌｕｍｅ

そこのＴ字路で曲がってしまえよ
こっちは直進だ
アクセルはカーブで踏み込めない

俺の邪魔すんなよ
何が気に食わねえんだよ
ああ　もう嫌になってきた
いっそハザードでも出したい気分だ

いきがり野郎とつまんねえ意地のせいで
何処までもカーチェイスが続く
何だってんだ　いい加減にしろよ

見通しのいい直進道路
お先にどうぞ、勝手にしやがれ
そうそう　ウインカー出して、さあ
ああ！？　元に戻しやがった

そういや見覚えのある車だ
いやでも夜道、よくわかんねえ
敵も味方もねえ　早く夜が明けないか

せいぜい目的地まで
俺と楽しみやがれってんだ
ほらいくぞ　５０ｋｍ／ｈ　ｏｖｅｒ
ハイビームぶちまけて

キミ ノ ウタ

手でも胸でもこの宇宙でさえ
抱えきれない唄が溢れる
僕は一つ一つすくいあげて
君へ届けたいと願う

僕の想いの総てを誰かに
伝えるのは難しい
でも必死になるよ
何度でも伝えるよ

世界が色とりどりの花を付けたよ
だからほら手を繋いで
冷たくてごめんね
でも心は君に触れて温かいんだよ
嘘も誤解も総て許し合って
真実に届けよう
誤魔化せないぐらい君が好きだよ
歯の浮くような科白だと
君は思うかな？

突き放してみたり
寄り添ってみたり
不器用すぎる二心
それで僕たちは前を向いているよ

心の中に浮かんだメロディーを

形にして空へ放っていく
伝えたい誰かがいたから
今日まで続いてきた作業
意味も愛も力も、後悔も涙も痛みも
優しさや慈しみだって
どれか一つ欠けても存在できないんだよ
こぼさず抱えていこう、その総てを
君の唄を

亡

オーディオのＬＲが狂っている
青色の灯に傾けた左耳
血は流れなくとも痛いのよ
そうか、私にはないのか

貴方を呼ぶための声も
触れるための身体も
産まれる前に忘れて来たのさ
ねぇ　どうして違っていたのかな
天使の梯子も想いは誘えない
何処に行けばいい？

信号機の案内が滲んでいる
赤色が柱を伝って泣いて
私も貴方になりたい
すくい取ったら一口で召し上がれ

心を叫ぶための唄も
透明な書籍の知識も
何処かに置いて来たのさ
もう取り返そうとも思わない
思う心さえ、既に
息絶えていたのさ

何処にいればいい？

Go way

無駄なことも悪くないだなんて
言ってられる時代じゃねえ
面倒な人生過ごしたくないのは
誰だってそう、俺だってその通りなのさ

癖のついた前髪をいつまでも
弄んでる余裕はないぞ
仲良しこよし、みな仲良く馴れ合うだなんて
状況でないこと、よくわかってるんだろう

だからその隙間を狙っていけ
セコいと呼ばれても気にすんな
俺はお前の味方じゃねえけど
お前の敵でもない、わかるか

ノイズだらけの日常に耳がイカれた
でも逆にクリアーになったものもある
今日の前髪が明日を拒んでも
道はいつでもそこにある、お前を試してるんだ

信じる言葉の中にある嘘で生きていけ
間違っても騙されるな、お前の今を進んでいけ
怯んだら負けだぞよく見据えろ
クズならクズなりに誇り持って生きろ

下手に生きる時代じゃない

綺麗に生きていけるわけでもない
足りなくても必死に頭使え
そして身体を重くとも前へ　前へ　前へ

同じ夜に絡めた指

ぼんやりしていたら誰かが僕を追い越した
別にいいよ勝手にしてくれよでもなんか痛いよ
ぶつかった肩じゃなくて
指し示せない何処かが

君にだけは吐きたくなかった嘘を重ねて
僕は何になりたいんだろう？

救って欲しいだなんて言ったりしないよ
君はそんなに強くないし
僕はそんなに弱くない
ただそこにいて笑って僕も笑顔を見せるから
短い永遠が続くように願い事をしよう

日の射すほうへ身体を向けて楽しめればそれでよかった
どんなに服を泥だらけにしてもそれは誇りだったんだ
でもいつの間にか清潔でいることを覚えて

時計とにらめっこしながら
やりたくないことに手を汚している

今更泣き言を吐いたりしないよ
逃げられないことはわかっているから
この扉に手を掛けることだけさ
ただたまには優しい素肌に触れて心を安らげたい
恥ずかしがらないで、その表情はとても素敵だけど

太い指と細い指を絡ませて通じ合えるのは二人だけでいい
何度だって言い続けるよ　Ｉ　Ｌｏｖｅ　Ｙｏｕ
君がどんなに頬を染めても
そう　傍にいて愛して　君と繋ぎたい理由があるんだ
同じ夜を越えて朝を迎えよう、眩しさに目をやられながら

あとがき。

何処の誰でしょうね、表紙に『３０編を予定』とか書いたのは。

ああ、俺ですね、サーセンｗ

途中で書きたいことがなくなってしまったんですよ。
詩って自分と向き合うことで、
そんなホイホイ産まれるもんじゃないと思っているし。

あることないこと織り交ぜながら、
伝えたいことはこの１８の断片に充分存在できています。
だから、ここからそれを読み取ってもらえばな、と思います。

これからの予定ですが、オリジナル小説を数ヶ月後に発表できればな、と思っています。

やることはこれ以外に沢山あって、心配なところもありますが、大丈夫。

また、会いましょう。

では。

蒼井　碧

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4197i/

レイテンシ[latency]

2010年10月10日00時21分発行